

---

trying

みうらいさお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

t r y i n g

### 【Nコード】

N 9 0 8 9 C

### 【作者名】

みづらいさお

### 【あらすじ】

以前のトラウマから何事にも本気で打ち込めない少年、悟が友人の見舞いに行った病院で出会ったのは、長く入院している同い年の少女だった……。

## プロローグ

「はあっ、はあっ」

走っている。僕は今、走っている。どうして？わからない。でも、走らなければ行けない気がする。

ここはどこだ？どこを走ってるんだ？真っ暗闇で何も無い。その中を僕は走っている。

ふと見ると、前を誰かが走っている。金髪の、僕と同じ年ぐらいの男。アイツを追いかけているのか？しかし、一向に差は縮まらない。それどころか広がっていく。

「くそっ」

尚も走り続けている。と、目の前に光が見える。あそこがゴールか？あそこまで行けばいいのか？僕はスパートをかける。

と、金髪の男が立ち止まってこっちを見ている。そして、僕に吐き捨てるように言った。

「お前みてえに才能ない奴、頑張ったってしょうがねえんだよ。」

それを聞いた途端、足が止まってしまった。走ることが出来ない。光は、どんどん小さくなって、消えてしまった。

## 第1章『出会い』

ふと気がつくと、僕 あいださとし 会田悟は、自分の家のソファに横になっていた。

「夢か……」

テレビを見ると、さっきまで野球をやっていたはずなのに、ゴルフの中継になっている。結構眠っていたらしい。

「あゝあ……」

中途半端に寝たので気分が悪い。さらにあんな夢を見たので機嫌も悪い。僕はずっとぼーっとしていた。

ふと、玄関の方からガチャガチャと音がする。誰か帰って来たようだ。

「ただいまあ。何、またテレビ点けっ放しで寝てたの？」

姉の真理だ。まり 近くのT大に通っている。昔から男勝りで気が強く、小さい頃はよく泣かされた。

そんな感じなので彼氏はなかなか出来ない。まさに男女という……

「何か言っただ？」

この辺でやめとこう。

「それにしても休日に家でダラダラしちゃって。他にやることないの？」

「うるさいね。こっちは普段部活で疲れてんの」

「何オヤジみたいなこと言ってるの。まったく、暇してんだったらお見舞いにでも行ったら？」

「お見舞い？」

「剛君よ。ほら、この間怪我したって言ってたじゃない」

「そういえばそんなことがあった。剛とは僕が幼稚園から一緒の、いわば幼馴染みだ。」

「サッカー部だが、この間の試合で骨折して、入院したらしい。お見舞いに行こう行こうと思ってはいたので、今日行くのも悪くない。」

そして僕は剛のいる病院に向かった。途中、さっきの夢のことを考えていた。

（また見ちゃったな……）

僕は中学の頃、陸上部だった。入部当初、顧問の先生に言われた。

「いいか、短距離は多少才能に左右されるが、長距離は努力なんだ。頑張れば頑張るだけ速くなる。そしたら、一番にだってなれる」

その言葉を信じた僕は、頑張って練習した。そのかいあって、県大会まで進んだ。が、その予選の時だった。

金髪の男 高見総一郎たかみそういちろうがいた。奴は県でも有数の選手だった。レースでは、当然のように大差をつけられ、負けた。

途中まで奴のハイペースについて行こうてしたが、結局スタミナ切れし、最下位に終わった。

レースの後、奴は僕にこう言った。

「お前みてえに才能ない奴、頑張ったってしょうがねえんだよ」

さらに客席から「ダッセエ」と聞こえた。

それ以来、僕は頑張ることを止めてしまった。が、高校に入っても、陸上部に入っている。

何故なら、陸上が好きだから。なんてカッコいい理由じゃない。自分でもわからないが、なんとなく、情性でやっているようなものだ。

そんなことを考えるうち、いつの間にか病院の前に来ていた。

（学校の真ん前なんだな）

見るとすぐ横手に、うちの学校のグラウンドがあった。

「すみません、草野剛の病室はどちらですか？」

「3階の一番奥の部屋です」

「どうも」

3階の奥……一際大きな笑い声がする。

（あそこか……）

部屋に入ると、怪我しているとは思えない元気な奴がそこにいた。

「よう、悟！！元気か？」

「お前程じゃないよ」

見ると足が上から包帯で吊られている。一応怪我人は怪我人らしい。

「なんだ、元気ねえな」

「ああ、ちよつとな」

「……また、あれ見たのか」

「まあ、な」

剛はどうやらすぐに察したらしい。こいつには何でもお見通しだ。

「つたく、いつまでも昔のことでウジウジしてんなよな！」

「わかってるよ。言われなくても……」

「まあ、元気出せや。過去のことだ、キッパリ忘れてな」

「怪我人が言ってもな……」

「ん？あ、そりゃそうだ！」

ガハハとまた大きい声で笑う。

「お兄ちゃんご本よんで　！！」

「ききたい　！！」

剛の弟と妹だ。6才の双子だ。さっきにぎやかだったのは、この2人の相手をしていたからだろう。

「わーったよ！読んでやるから！」

「じゃあ、俺そろそろ帰るよ」

「そっか。悪いな」

「気にするなよ」

部屋を出ようとすると、剛が呼び止めた。

「悟、何なら屋上に行ってみろよ。あそこから見ると夕焼けは凄いだ。悩みも吹っ飛ぶさ」

「ふっん」

特に急ぐ用事もないので、行ってみることにした。階段を上りきり、ドアを開けると……

「うわあ……」



そこには見たことないくらいに綺麗な夕焼けがあった。本当に空一面オレンジ色で、それはもう、テレビでしか見たことがないような景色だった。

（確かに、悩みも吹っ飛びそうだな）

十分に夕焼けを堪能したので、帰ろうとした時、視界に女の子が入った。誰だろう。患者の子だろうか？

年は同じくらい。背はやや低め。髪は肩の辺りまでかかっている。そして屋上の端の方で、じっと下を見ている。その顔はどこかなしげだ。

（まさか……）

僕は嫌な予感がしてきた。しかし、それをなんとか打ち消そうとした。まさか、そんなわけないさ、ただ下を見ているだけさ。飛び降りようなんてことは……

と、その子は金網に手を掛けた。

（やばい！！）

やっぱり自殺か？どうする、誰か呼んで来るか？いや、そんなヒマはない！

「待つて！！」

僕は彼女の方へ走って行って彼女を止め……ようとした。しかし、

志半ばで転倒した。彼女はそれを呆気にとられた様子で見ている。

それが、2人の出会いだった。

## 第2章 『音色』

「あっはっはっは!!」

またも病室に馬鹿でかい笑い声が響き渡る。

「それで助けようと思ってズッコケたのか! バツカで〜!」

例の女の子に会った次の日、また剛の見舞いに来た。そして昨日のことを話してみるとこのありさま。

本当にでかい声だ。剛の病室は3人くらいの相部屋だが、他の2人は最近退院したらしく、今は剛1人だ。

だが、それは幸いだった。何故なら、他に誰かいる時にこんなでかい声で笑おうもんなら、どんなに怒られたかしない。

それにしてもまだ笑っている。僕はいい加減腹が立ってきた。なのでギプスを軽く小突いてやった。

「おおっ……」

痛そうだ。どうやら怪我人は怪我人らしい。

「いててて……」

ギプスを擦る剛。昨日の子だが、どうやら別に死のうとしていたわけではなかったらしい。ただ夕焼けを見に來ただけだという。

「またやつちやったな……」

僕は人に言わせると、ちょっと抜けているらしい。所謂「天然」というヤツなんだそうだ。

みんなは悪い意味で使っているのではないようだけど、何だか言われてあまり気分の良いものではない。

だって、こっちは真面目にやってるのに、笑われたりすることもあるのだ。そんなの、たまったもんじゃない。そりゃあ、よく転ぶし、忘れ物が多いけど……。

「まあ、でもお前らしいよ」

さっきまで痛さで悶えていた剛が座り直す。ようやく収まったようだ。

「その子が本当に死んじゃうんじゃないかって、ほっとけなかったんだよな。そういうの、悪くないぜ」

さっきまで爆笑してた奴の台詞とは思えない。でも、それで少し機嫌が直った。

「それで？その子とは何か喋ったりしたのか？」

「……いや、別に」

「何で？そんなチャンスめったに無いぞ？」

「それが……」

実は飛び降りようとしたのでは無いとわかった後、何だか恥ずかしくなってそのまま帰ってしまったのだ。だから名前もここに入院してるのかどうかもわからない。

「かゝもつたいねえ！」

自分のことの様に悔しがる剛。

「俺だつたら絶対にその場で口説いたのになあ！」

剛は典型的な女好きで、かわいい娘を見掛けては、声を掛けずにはいられない、というような奴である。あの場にいたのが剛じゃなくてよかった。

すると、看護婦さんが入って来た。そろそろ帰った方が良さそうだ。

「じゃあ、また来るよ」

「おう、またな。」

剛の病室を出た後、時計に目をやった。5時を少し過ぎたぐらい。昨日あの娘にあったのと同じぐらいの時間だ。

（ちょっと、もう1回行ってみるかな……）

どの道後は帰るだけだし、また夕焼けを見てから帰るのも悪くない。それに、もしかしたらまたあの娘に会えるかもしれない。

屋上に出ると、昨日と同じように夕焼けが広がっていた。やっぱり

ここから見る夕焼けは凄い。本当に空一面オレンジ色で、下の町並みを見ると、えらく小さく思えた。

そして僕は夕焼けに見とれながらも周りを見渡して見た。

(……いた！)

やはりいた。昨日と同じ所に。僕はゆっくりと彼女の近くへ歩いて行った。近くで見ると、その姿は綺麗だった。思わず見とれてしまふ。

と、視線に気付いたのか、その娘がこっちを向いた。僕はドキッとする。

「や、やあ」

僕はぎこちない挨拶をする。

「よ、よくここに來てるの？」

彼女は少しこっちを見ると、また正面を向き直した。ちよつと間が出来る。

「……はね……」

その娘が口を開いた。

「入院したての頃に、看護婦さんが教えてくれたの。凄いんだよつて」

「そうなんだ」

「それで、キミの言うように、よくここに来てるの」  
少し微笑む。

「長いこと入院してると退屈で、ここに来るのが楽しみなんだ」

「どのくらいいるの？」

彼女は側のベンチに腰掛け、少し考える仕草をする。

「もう、1年ぐらいかな？」

「そんなに……」

僕も隣りに腰掛け……ようとしたが、ちょっと離れて座った。この根性なし、と頭の中で誰かが言う。しょうがないだろ、とそれに言い返す。

なんせ僕は女の子と付き合ったことなんてなかったし、あまりまともに話したこともなかったのだ。

「でも、昨日は驚いちゃった。だってキミがいきなり走って来るんだもん」

「あつ、あれは……」

「私を助けようとしてくれたんでしょ？なんだか嬉しかった。ありがとう」

そう言っ て向けられた笑顔に、僕は思わず目をそらしてしまった。

「あつ、名前言っ てなかったね。私、高木凜」

高木凜……どこかで聞いたような。何処でかはわからないが、初めて聞く名前ではない気がした。

「よろしく、僕は……」

「会田悟君でしょ？」

驚いた。彼女は僕の名前を知っ ていたのだ。

「えっ、俺のこと知っ てるの？」

当然の疑問を投げ掛ける。すると彼女は立ち上がった。

「そろそろ部屋に戻らなきゃ」

クルツと振り返り歩き出す。が、途中でつまずいて、よろける。

「危ない！」

僕はとっさに抱き抱えていた。

「ありがとう。また助けられちゃった」

凜はニツと笑う。僕はそのまま、彼女の病室までついて行っ た。



病室は3階の、剛の病室とはちょうど反対側にあった。凜は、ベッドに腰掛ける。

「さっきの話……」

「え？」

「何でキミのことを知ってたかって言うかね……」

言いながら、窓の方を向く、そっちを見ると、見慣れた光景があった。

「グラウンド……」

それは、僕が普段部活で走っている、学校のグラウンドだった。

「いつもあそこを走ってるでしょう？ 私走れないから、いつもここから見てたの」

そうか。ここは学校の近くだった。ん、学校？

「あっ……」

僕はハッとした。さっき気になったことがわかった。

「もしかして、1年の時に同じクラスだった？」

「……覚えててくれたの？」

彼女は嬉しそうだ。そう、僕は彼女と同じクラスだった。ただ、入

学式から数日して、すぐに入院してしまったため、話したことはなく、いつも席が一つ空いていた。

「クラスの子は、来たりするの？」

彼女は首を横に振った。

「ううん、ほら、私入学式のちょっと後には入院しちゃったから、友達ができる間もなくて」

それにしたって全然誰も来ないなんて、薄情なもんだと思う。自分のことは棚にあげて。

「お父さんとか、お母さんは？」

また首を横に振る。

「2人ともね、仕事が忙しくて。お父さんは仕事柄、よく海外出張に行くんだ。でもそれだけじゃ足りないからって、お母さんも働いてるの。休の日には、たまに来てくれるんだけど」

「そっか……」

どうやら凜は独りぼちのようだ。1人でこんな所にいるのが、どれほど寂しいだろう。

それでも彼女は平気だよ、とでも言うように笑ってみせる。何かしてやれることは、ないだろうか。

「じゃあ、俺が……」

「え？」

「俺がさ、ちよくちよく来てさ、話し相手になるっていうのは……  
だめかな？」

僕はちよつと勇気を出して言ってみた。彼女はちよつと驚いた顔をしている。が、

「本当！？」

初めて聞く大きな声だ。どうやら喜んでくれているようだ。少しホツとした。

ふと、凜の側にキーボードがあった。

「これは？」

「それはね、お母さんが使ってたのをもらったの。私、小さい頃から体弱くて、外に遊びに行けなかったから、いつも家の中で弾いてたんだ」

確かに、年季の入った感じがする。

「じゃあさ、何か弾けたりするの？」

「ええ」

「ちよつと、弾いてみてよ。聴いてみたいな」

「うん、わかった」

そう言っただけで彼女はキーボードに向かう。そして指を動かしていく。その指さばきと同時に、いくつもの音が生まれていく。

その音と音とが重なり合って、いくつものハーモニーが生まれていく。

（うわあ……）

僕はクラシックなんてわからない。これが誰の何という曲かもさっぱりだ。けれど、彼女が奏でる音色は、不思議と僕の胸に響いた。楽しげだったり、時に激しく、優しくもあり、でも、どこか寂しげであるようにも感じられた。

弾き終わってこっちをみた凜の顔は、少し驚いたようだった。

「どうした…！」

すぐに気付いた。僕は、不覚にも涙を流していた。

「まいったな……」

「ふふふ……」

「ははは……」

2人して、笑った。これから何か、素敵なことが待っていそうな気がする、そんな再会だった。



### 第3章 『将来』

「それでさ、階段3段飛ばしで走ってさ」

「えっ、そんなに？」

「これは間に合うんじゃないかと思ったんだけど、あと1歩及ばなくて」

「遅刻しちゃったの？」

「これが運のいいことに1時間目は先生休みで自習でね」

「わあ」

あれから何度となく、凜の病室に来るようになった。夜の7時頃までは面会時間になっているらしく、部活終わりに寄ったりする。

学校でこんな話があったとか、テレビがどうだとか、音楽の話とか……。たわいのないことを話している。

凜も色々と話を聞かせてくれた。自分の小さい頃の話、引越してしまった友達の話、両親の話……。

この間、出張中の父親から手紙が来たらしい。凜はそれを大層嬉しそうに見せてくれた。

「ふーん、それで最近来てくれなかったのか」

膨れっ面をして言う剛。

「くそうっ、俺だって寂しいだろう!？」

「よせよ、気味の悪い」

ブーッとさらに膨れる。女の子がしたらきつとかわいいのだろうが、剛がやると何も感じない。不思議なものだ。

「でもさ、いいじゃん、アツアツでさ」

「アツアツって……そんなじゃないよ」

「どうだかな。お前はそれでも、向こうは案外その気かもよ」

「まさか。友達ってぐらいじゃない？俺、あんまりそういう経験ないからわかんねえよ」

「ふうん。ま、いいや。今日はもう会ったのか？」

「これから行くところだよ」

「そっか。出来れば俺のことも紹介してくんない？」

「ん……まあ、考えとくよ」

そして凜の部屋へ向かう。剛には紹介してくれと頼まれたが、当分しないでおこうと思う。なんだかもったいない気がするからだ。

コンコン、とノックを2つしてから入る。

「よっ」

「こんにちは」

凜は目を擦っている。

「あ、ひょっとして、寝てた？」

「うん、少し……」

「悪いことしちゃったなあ、起こしちゃった」

「ううん、平気」

そして例によって会話に興じる。凜はまだ少し眠そうだったが、色々と話した。不思議なもので、彼女にはなんだか話したくなる。

「その袋……」

と、凜が僕が手に持っていた袋を気にする。

その時僕は、普段部活の時に履いているランニングシューズを持っていた。

いつもは学校に置いて帰るけれど、明日は競技場で練習するため、持って帰ることにしたのだった。

「ああこれ？ランニングシューズだよ。いつも部活の時に使ってるんだ」



「どのくらい使ってるの？」

「そうだなあ、陸上始めたぐらいの時だったから……」

「そんな前から!？」

凜は驚いた様子だ。陸上を始めて間もない頃、親父とシューズを買いに行った。その時に親父にどうせでっかくなるんだからって言われて、サイズの大きめな靴にした。

だが、中2で身長が伸びなくなつて、結局そのまま使っている。

「もうそんな使ってるもんだから、こんなになっちゃって」

袋からシューズを取り出す。もうスッカリボロボロで、爪先のあたりがパツクリ開いている。踵もちよつと剥れそうだ。

「うわあ……」

凜はまじまじとその靴を見ている。

「こんなになるまで使うなんて、悟君は本当に走るのが好きなんだね」

そつだよ、とは言えなかった。正直なところ、始めはそうだったろう。でも、例の出来事以来、わからなくなつてしまった。

「どうなのかな、その辺よくわかんないんだ。ただ何となくやってる気がする」

「そうなの？」

凜は不思議そうだ。

「でもさ、なんとなくやってる人の靴が、こんなになるかな？」

「そりゃあ、4年も使ってれば……」

凜はまだ納得がいてない様子だ。

「でも、適当にやってる人が4年使ったとしても、ここまではならないと思うな。努力してきたからだよ」

凜はさらに続ける。

「それで、そんなに努力出来るってことは、やっぱり悟君はさ、心の底では走るのが好きなんだと思うな」

そう言つて凜は笑う。確かに一理ある。嫌いになったのなら辞めてしまえば良いのに、まして高校でも陸上を続けることなんてなかった。

それでもやっていたのは、意志が弱いから、惰性でやっていると思つてたけど、もしかしたら、やっぱり走るのが好きだからかもしれない。

「あ、ごめんなさい、偉そうなこと言つて」

「いや、いいんだ。またゆっくり考えてみるよ」

「うん」

と、シューズの袋から一枚紙が落ちた。

「あっ！」

「どうしたの？」

「これ、明日までなの忘れてた。」

それは進路希望調査のプリントだった。先週ぐらいに渡されたのだが、その時は急いでいて、袋の中に入れて、それっきりだった。

「進路希望かあ………どうするの？」

「わかんないなあ……。これといってなりたい物もないし。普通に大学行くかな」

「そっか」

「凜は何かある？進路っていうか、将来の夢とかさ」

凜はフフッと笑って言う。

「あるよ」

「えっ、何々？」

「何だと思う？」

何だろう。考える。しかし、勘がよくない僕は見当違いの物しか思いつかない。

「わかんないや。何になりたいの？」

「あのね……」

すう、と深呼吸をする。

「ピアニスト」

「そうなんだ。どうしてなりたいてって思ったの？」

「あのね、遊びに行けなくて辛い時、ピアノを弾くと、何だか救われて、楽しくなって。だから、大きくなったら今度は私が沢山の人をピアノで楽しませたいって思って」

「そうなんだ」

「いつかは、ヨーロッパで音楽の勉強をしてみたいんだ」

僕は素直に感心してしまった。そこまで考えているなんて。

「でも、私病気してるから、とても……」

「できるさ」

僕は立ち上がっていた。

「それを治すために病院にいるんだろ？だからさ、きっと行けるよ」

「悟君……」

「俺、頑張ってみる。だからさ、頑張ろうよ」

凜はうん、とニコツと笑った。彼女のおかげで、ちょっとだけ前向きになれた気がした。

そして、彼女の将来の夢を、僕も応援したいと思った。

## 第4章 『衝突』

5月も半ばになった。だんだんと暑くなってきた、もう半袖で過ごすようになった。

「それでさ、その時アイツが……」

「へえ」

今もまた凜の病室に来ている。この所毎日来ている気がする。凜はいつも笑って話を聞いてくれる。ただ、今日はどこか様子がおかしい。

「どうしたの？体調悪い？」

「ううん、それは大丈夫」

とは言うものの、どこか浮かない顔をしている。

「あのね、悟君」

と、凜がこちらへ向き直って言う。

「その、最近いつも来てくれるけど、いいの？その、勉強とか、部活とかで忙しくない？」

意外な質問だった。

「何で？別に大丈夫だよ？」

「でも、たまに凄く疲れてそんな時とかあるし……。それに、テストとかもあったんでしょ？私は来てくれたら嬉しいけど」

凜は俯いている。

「大丈夫だって！心配すんなよ」

そう言うと凜は「うん」と言って笑った。しかし、いつものようなそれではなかった。

「じゃあ、今日はこれで帰るよ。明日試合があるんだ」

「そっか。頑張ってたね」

「おう」

そう言って家に帰った。

「ただいま」

「ちょっとアンタ、何よこれ！」

帰るなり姉が大きな声で言う。見るとこの間の中間テストだ。部屋に無造作に置いていたのを、姉が見つけたらしい。

「全部平均より下じゃない！」

「うるさいな、良いだろ別に」

「でもアンタ、去年はもう少しよかったでしょ。これはちょっと落ちすぎよ?」

「そりゃあ、そんな時もあるんじゃない?」

僕は面倒臭くて適当に受け答える。

「あの娘の所に行くようになってからね」

実は姉には凜のことを少し話していた。僕はそのまま2階へ上がるうとしたが、その一言で立ち止まる。

「どういうこと?」

「だって、あの娘に会ったのは4月頃でしょ?その頃から成績が悪くなってるし」

「……凜は関係ないだろ」

「でもあれから帰りが遅くなって、勉強しなくなったのは事実でしょ?そりゃ、会いに行くとは言わないけど……」

「……何が言いたんだよ」

僕はなんだかイライラしてきた。喧嘩腰になってしまう。

「言いたくないけど、あの娘は病人なのよ?毎日のようにアンタと喋って、疲れないわけないでしょう?」

「わかってるよ」



「それにアンタだって成績こんなし……」

「わかってるって言うてんだろ」

僕は2階へ駆け上がって行った。明日は試合だし、もう寝ようと思った。しかし、姉の言葉、そして凜の言葉が頭から離れない。

2人ともなんだか、同じことを言っているように思えてくる。

何だろう？凜は俺を気遣ってくれている風だったけど、本当はもしかして、遠回しに来るなっということなのか？

いや、まさか、そんなはずは。だって凜も来てくれるのは嬉しいって言うてたじゃないか。

でも、それは凜の優しさで、本当の所は結構無理してるんだろうか？

「あゝやめやめ！」

僕は首を振って、考えていたことを打ち消した。今は、明日のことだけを考えよう。明日は試合だ。

1年の時は、怪我とかもあって、試合には出られなかったので、中学以来となる。そう、あの日以来だ。でも、多分大丈夫だ。

そうだ。試合が終わったら、凜に会って、試合のことを話そう。きっと笑って聞いてくれるはずだ。

翌日、県営の陸上競技場。今回は公式戦なので、8月のIHまで続

いている。負けたら終わり、まさに1回1回が1発勝負だ。

同じ長距離パートの部員とアップをする。しかし、まだ昨日言われたことが引つ掛かっていた。結局、あれこれ考えてしまつて、あまり眠れなかった。

「……会田、会田！」

「えっ？」

ふと見ると、他のみんなは走り終わっていた。

「どうしたんだ？何かボーツとしてさ」

「いや……」

「何か悩みでもあるのか？」

キャプテンの先輩が、心配そうに言う。

「あ、大丈夫です。何でもないです。昨日、あまり寝てなくて」

「何だ、緊張でもしたか？」

「ええ、まあ」

本当はそんなじゃなかった。でも、今日は先輩達には最後のチャンスだ。余計な心配をかけさせるわけにはいかなかった。

そして何より、自分も試合に集中しよう。そう自分に言い聞かせた。

「ただいまの男子1000mの結果は……」

地区大会が始まった。やはり思うに、こういう類の物は残酷である。コンマ1秒、瞬きをするぐらいしか差がないとしても、落ちる人がいる。トイレやロッカールームで泣いている人を、何人か見た。

「男子5000mに出場する人は……」

どうやら時間らしい。僕はユニフォームを着て、召集場所に向かった。

5000mというのは、400mトラックを12周半走る。そして、タイムで上から24人が次の県大会へ進むことが出来る。

「次の組！」

出番だ。胸の高鳴りを抑えつつ、僕はスタート地点に立った。レースでは走ったことはないけど、練習ではよく走っている距離なので、特に問題はない。そう思っていた。だが……

「パン！」

レースがスタート。と、すぐに違和感に気付いた。

（何だ？足が……）

足が信じられないほど震えている。心臓も高鳴りを増している。これが実戦の緊張感なんだろうか。

（落ち着け、落ち着け）

何とか自分を落ち着かせようとする。そうこうしているうちに、3周ほどすぎる。先頭は随分前にいつてしまっている。

（くそっ、こんなにキツかったか？）

僕は軽くパニックになっていた。さらにレースは進み、僕は7周目を過ぎた所だ先頭は8周目らしいけど。

ふて、スタンドから声が聞こえる。

「急げー！失格になるぞ！」

僕は少しして、その意味する所がわかった。先頭がすぐ近くまで来ていた。

こういうレースでは周回遅れというのは必然的に出て来る。そこで3000mを越えて周回遅れになった者は失格になってしまうのだ。僕は抜かれまいと踏ん張る。が、その時客席から

「ダッセエな」

という声が聞こえた。もしかしたら自分に言ったのではないかも知れない。だが、その一言がああ記憶を甦らせる。

結局僕は、それで足を止めてしまった。

「はあ……」

地区大会が終わり、みんなが帰る中、僕は一人、近くの公園のベンチに佇んでいた。

（何も変わってないな……）

あの時、「ダッセエ」と聞いた時、例の高見の台詞も思い出して、もういいやっていう気持ちになった。やはり「あの」出来事は、今でも暗い影を落としている。

（どうすっかな……）

凜の所に行くか迷った。こんな結果で、どの面下げて行かってんだ。でも、結局行くことにした。慰めて貰いたかったのかもしれない。

「よっ」

「こんにちは」

それから色々話をする。しかしやはり凜はあまり元気がない。

「それでさ……ねえ、聞してる？」

「え？っ、うん」

「どうしたんだよ、ボーッとしてさ」

「うっん……」

凜はどこか上の空だ。ふと、こっちを向いて言った。

「そう言えば、今日、試合だったんだよね？どうだった？」

「……だめだった」

「……そう」

僕はわざとらしく笑った。

「いや、ダメだったな。やっぱり勝負の世界は甘くないよな。ハハ……。俺ダメだな。陸上も勉強もさ。テストも赤点取っちゃうし……」

凜は慰めてくれると思った。しかし、彼女は思い詰めた顔で言った。

「私の……せい？」

「な、何言ってるんだよ。そんなわけないだろう？」

「でも、最近無理してる風だったし、テストだって、私の所にずっと来てたから、ちゃんと勉強できなかったんじゃない……」

「だから違うって!!」

思わず声を荒げてしまう。何だ？何でそんなこと言うんだ？僕は混乱してきている。

2人の間に沈黙が流れる。

「何だよ、昨日もそんなこと言ってたよな。ここに来て良いのかって」

僕の中で、凜と姉に言われたことが、ぐるぐると回っていた。

「何なんだよ、来て欲しくないんだったら素直にそう言えよ」

「そつ、そんなこと……」

「そういうことだろ？俺が無理してるとか、自分のせいだとか言つて、本当の所は鬱陶しいから来るなってことなんじゃないのか？」

「そんな！」

凜も声が大きくなる。むちゃくちゃ言ってるのはわかってた。でも、溢れる感情を抑えられなかった。

しばしの沈黙……。そして、

「じゃあ、どうして来てくれるの？」

凜が口を開いた。

「それは……」

「ねえ、どうして？」

僕は答えられず、口ごもってしまう。

「私が独りだから？」

「え？」

「私が独りばつちで可哀相だから？それで来てくれるの？」

「何言つて……」

「同情して来てくれるの？」

「それは違……」

「じゃあ何で!？」

見ると凧は目の涙を溜めている。僕はやはり答えることが出来ない。そんなこと、考えたことはなかったのだ。

「ほら、答えられないってことは凶星なんだ！可哀相だから、同情して来てくれるんだ！」

「だからそれは……」

「もういい!!」

病院中に響き渡らんばかりに声を張り上げる。

「そんな同情とかで……来てくれるんだっただ……もう、来てくれない!!」

凧はもうボロボロと涙をこぼしていた。

「だから違う!!」



と、そこへ看護婦さんが入って来た。

「ちょっと！うるさいですよ！病院には他にも患者さんがいるんですよ！？」

「す、すみません……」

「もう、静かにして下さいよ？」

それだけ言つと、看護婦さんは出て行つた。またしても沈黙。凜は全くこちらを見ない。僕は何も言わず部屋を後にした。

僕は階段を降りながら考える。今ならまだ間に合う。戻って謝るか？でも何を？俺が悪いのか？それに行つた所でまともに取り合つてくれるのか？でも、帰つたらこれつきりになつちまうんじゃない……。それでもいいのか？

もう外に出て来ていた。やり場のない怒りを、夜空に向かって叫んだ。

「もう……何だつてんだよ！！」

その声は、頭上に広がる黒に吸い込まれていった。

## 第5章 『素直な気持ち』

あれから3週間がたとうとしていた。僕は結局、あれ以来1度も凜に会いに行っていない。あんなことがあって、自分でもどうなのかよくわからなくて。

さらに期末テストも近いので、勉強もしなければいけなくなり、色々忙しいというのもあいまって、行かなくなった。

「はあ……」

たまにグラウンドから病院の方を見えるが、凜の部屋のカーテンは閉まったままだ。ただ、明かりが点いているので、退院したかではないようだが。

「同情で来てくれるんなら、もういい!!」

あの言葉が、今でも頭の中で時折繰り返される。同情のつもりで行ったとは思わない。でも、それならどうして行ってたんだろう？それがわからない以上、あんな風に言われても仕方ないのかな。

「じゃあ明日からテストだから、ちゃんと勉強しとけよ?」

そうだった。明日からテストなのだ。とりあえず帰って勉強をしよう。そうしたら、少しは気が紛れるだろう。

しかし、それは甘かった。考えないようにすればするほど、かえって気になってしまう。おかげで全く勉強に身が入らない。

「何なんだよ……」

僕はやる気を無くして寝転がる。すると、部屋のドアがノックされる。

「悟！友達が来てるわよ！」

「友達？」

誰だと思いつつ、玄関へ。

「よっ、久しぶり！」

そこにはギプスも何もしていない剛がいた。退院したらしい。

「昨日退院したんだよ！」

「で、何だよ？俺今テスト勉強してんだけど」

「な〜にがテスト勉強だよ！どうせやる気無くして寝てたんだろ？」

悲しいかな、凶星だった。仕方無く、剛を部屋を招き入れる。

「まあまあ、せっかくこうしてノロケ話を聞きに来てやったんだからさ」

「ノロケ話？」

「ほれ、あのお前がよく会いに行ってる娘だよ」

「ああ……」

僕は少しためらってから言った。

「行っていないんだ。しばらく」

「え？何で？」

僕はこの間何があったのか話した。剛も顔が真剣になる。

「なるほどねえ。そんなことが」

「それでさ、なんか行けなくなっちゃって、彼女、もう俺に会いたくないだろうし、行って無理させるのもな……」

剛は少し考えている。そして、こっちをまっすぐ見て言う。

「お前さ、彼女がどういう気持ちでそう言ったと思う？」

「え？」

「だから、もう来なくていいって言ったことだよ」

「えっ、そりゃあ、鬱陶しいから来るなってことじゃ……」

「本当にそう思うか？」

「えっ、違うのか？」

「恐らくな。お前が出てった後、彼女どんな様子だった？」

僕は去り際に1度だけ振り返った。すると彼女は……。

「泣いてた……」

「なるほど。もしもお前のことを本当に鬱陶しいと思っていたとしたら、何で泣くんだった？清々した、ってなもんだろ？」

確かにそうかもしれない。少しくらいスッキリしていてもいいものだ。でも……。

「じゃあ、何で泣いてたんだ？」

「きつと、彼女が行ったのは本心じゃねえ」

「え？」

「思うに、あれはお前の為を思ってたことだ。その前の無理してないかっていうのな」

「え、どうして？」

「わかんねえのか？考えてもみる、お前のことが嫌いなら、もっと早い段階で追っ払ってる筈だ。それに、彼女はお前の名前を知っていた。何でだと思っ？」

「……同じクラスだったから？」

剛はチッチッチと指を振る。

「すぐに入院しちまったんだろ？そんな娘がクラス全員の名前、覚えてねえよ」

「じゃあ、どうして」

「まだわかんねえのか？ホント鈍いなあ……」

やれやれ、とても言いたそうだ。

「向こうはさ、お前のこと、好きなんだよ」

思わずドキン、とした。

「な、何言ってるんだよ」

「彼女、辛かったんじゃないか？お前に無理をさせまいと、気を遣ったこと。本当は、待ってるんじゃないか？」

「何を……」

「だから、お前が来てくれるのをさ」

「で、でも……」

まだ渋っている僕を見て、剛は呆れ顔だ。

「じゃあさ、お前はどつなの？」

「え？」

「何で彼女の所によく行ってたわけ？彼女の言うように、同情なのか？」

「違う！！」

「じゃあ、何でだ？」

「そ、それは……」

凜に聞かれた時もそうだった。同情じゃない、それは否定出来るのに、じゃあ何故かと聞かれると答えられない。

「よく考えてみな。初めて会った日のことからさ」

初めて会った日……。かわいいなと思った。それで、こんな娘が自殺するなんて駄目だ、助けたいと思って、止めようとした。

それは勘違いだったけど、独りぼっちだと聞いて、何かしてやりたい、力になりたいって思った。

そして話していると楽しくて、いつしか会いに行きたくなっていた。それで、会わなくなつて、今僕は辛い。

「……！」

「やっと気がついたかよ」

剛がニツと笑う。

「俺……凜のこと、好きなのか……」

なんだ。そんな簡単なことだったんだ。今まで会いに行ってたのは、同情とかそんなんじゃない。ただ、僕が、好きな人に会いたかっただけなんだ。

「それがわかったのなら、やることは1つだよな？」

そうだ。彼女に会いたい。会って、自分の気持ちを伝えるんだ。もしかしたら、また突き放されて、辛い思いをするかもしれないけれど……。

とは言え、やはりしばらく振りなので、病院まで行くのに少し勇気が要った。

「つたく、なんで俺まで……」

剛が不満を漏らす。

「いいじゃないか。頼むよ」

「でも俺、入口までだからな。先に帰るぜ」

「そうか……」

「ま、しっかりやれや。自信持つてな」

そう言って剛は帰って行った。

凜の部屋の前まで来た。ドアの前に立つと、心臓が凄いい勢いで高鳴っていく。もしかた突き放されたら……。その思いがなかなかドア



をノックさせてくれない。

と、携帯のバイブが鳴る。病院では切らないといけないのを忘れていた。それには「コラ！」と一言

（剛の奴……）

僕は少し笑った。何だか勇気が出て来た。そして思い切ってドアをノックする。「はい」と声がする。これを聞くのも久し振りだ。

凜にしてみれば、看護婦さんが来たと思ったのだろう。僕を見ると大層驚いた様子だった。

「ひ、久し振り……」

「うん……」

どこかぎこちない2人。そりゃそうだ。会っのはあれ以来なのだから。

「いろいろ……」

「え？」

「いろいろ……考えた。俺、ここに来なくなってから。それで、それを伝えに来た」

1つは自分のトラウマのこと。凜には話しておきたかった。それに、「私のせい」というのへの弁明の意味もこめて。

凜は黙って聞いている。

「それともう1つ」

僕は1つ深呼吸をする。

「何で、ここに来てたかっていうと……」

緊張しているのが、自分でも痛いほどわかる。凜は下を向いて、目を合わせない。

「同情で来てるのかって言われた時、何も言い返せなくて、そうだったのかなって、自分でも思ったりした。でも、あれから考えた。どうして来てたかって。半分くらい、剛、ああ、友達に教えられちゃったけど」

僕は凜をまっすぐ見つめて続ける。

「俺さ、最初、君の力になりたい、君の為だと思ってた。でも、だんだん話してるうちに、俺の方が来たくなくて、会いたくなくて……。この3週間、なんかつまらなくてさ」

僕は立ち上がった。

「俺……上手く言えないけど、君が……凜が……好きだ。好きなんだ。だから、会いに来たんだ」

しばしの沈黙。やがて、凜が口を開く。

「あの日……」

「ん？」

「初めて会った日、あの夕焼けの日、覚える？」

「ああ、俺が勘違いしたヤツ」

「あれね、実は勘違いじゃなかったの」

「……え？」

「私ね、小学校、中学校とあんまり学校行けなくて、高校こそはっ  
て思ってたのに、また長く入院しなきゃいけなくなって、もう凄く  
嫌になってたの。だからあの時、本当に死んじゃおうって思った」

それは、とても衝撃的だった。そんなことがあったなんて。

「そこへキミが来てくれた。あつ、入学式の時に見た子だって。ま  
るで王子様が助けに来てくれたみたいだった。だから、あの時本当  
にキミは助けてくれたの」

「そうだったのか……」

「それから、キミが……悟君が会いに来てくれるようになって、私、  
凄く嬉しくって、それからが一番の楽しみになった。それでどんど  
ん好きになって……でも、ある時思ったの」

凜は窓に目をやる。

「私のせいで、悟が無理してるんじゃないかって。悟君はさ、優し

いから、忙しいのに無理やり来てくれて、他のことに支障をきたしちゃうんじゃないかって」

「凜……」

「それで悟君が嫌な思いをしたら嫌だっと思って……。本当はすごくすごく会いたいの、私、強がっちゃった」

凜は目につつすらと涙を浮かべている。

「バカだよ……。自分で来ないでって言ったのに、ずっと寂しくって泣いてばかりだった。何であんなこと言ったんだって、自分を責めたりした。でも、今、すごく、嬉しいよ」

僕は思わず彼女に抱きついた。彼女は僕の胸に顔を当て、泣いた。

「うつ……うつうつ」

「ごめんな。寂しい思いさせて」

「うつん、いいの。ありがとう。ありがとう……」

僕らはこの日、初めてわかり合えたのだと思う。止まっていた時間が、動き出したような気がした。素直になってよかった。勇気を出してよかった。もう、凜に寂しい思いはさせまい、そう心に誓った。

空には、ちょうど一番星が輝きだしていた。

## 第6章 『七夕』

「でさ、やっぱり凄かったよ国立は」

「そうなの？」

「なんていうか、客席全体が真っ青なんだよね」

「へえ」

「でも負けちゃって悔しいよなあ。俺があの時出ていれば……」

「もっとひどかっただろうね」

「あつ、ひでえ！」

あれからというものの、僕らは前より仲良くなった。何と云うか、お互いに言いたいことを言うようになって、どんどん打ち解けていつている。

そして、お互いに無理をしなくなった。体調が悪い時は言ってもらうことにし、僕が忙しい時は無理矢理行くということがなくなった。

そのくらいがちょうどいいんだと、実感する。

ちなみに、期末テストは、見事に前回の借りを返すようにいい感じの成績だった。

「ん？」

カレンダーの7月7日の所に　がされてある。七夕だからかな？

「ねえ、あのカレンダーの　って……」

「え？ああ、あれね。何だと思う？」

「うーん……七夕だから？」

「それもあるけど……もう1つあるんだ」

「えっ、何々？」

「わからない？」

「うーん……誕生日とか？」

凜は笑う。どうやら当たりだ。

「それでね、その日はこの近くの神社でお祭があるの。それでその日、もし体調が良かったら、特別に行ってもいいよって言われたんだ」

「そうなんだ。それはさ、ご両親と行くの？」

「ううん、一緒に行こうって言われたんだけど、他に行きたい人がいるからって断っちゃった」

「え、それって……」

僕は恐る恐る聞いてみた。凜はニヤリとする。

「悟君、一緒に行ってくれる？」

僕はホッとした。他の誰かでなくてよかった。

「俺で良ければ」

「やった！誕生日にデートだ！」

凜はまるで子供のようにしゃぐ。

「おいおい、あんまりはしゃぐなって。小学生みたいだぞ？」

「あつ、何よそれ」

「遊園地に行く子供みたいだ」

「ちょっと！さっきから子供扱いして」

「えゝ？でも背なんかこんなじゃないか」

僕は立つて、腰の辺りに手をかざす。

「そんなに低くないよ！」

顔を赤くして怒る凜。僕はケラケラと笑った。七夕の祭、楽しみだなあ。

「あつ」

僕は授業中だが、思わず声に出してしまった。

「ああ？」

よりによって鬼山の授業だ。

「あ、いえ、何でもないです」

その日は誕生日なんだから、何かプレゼントを渡そうと思ったのだ。でも、こういうのは何を渡せば良いのだろうか？

「プレゼントオ？」

僕は剛に聞いてみることにした。こういうことは、アイツはよく知っているからだ。

「実は……」

僕はことの経緯を話した。

「ほお、それでプレゼントか。でもそんなの、お前が好きに選べば良いんじゃない？好きな人からのプレゼントなんて、何だって嬉しいと思うけどな」

「いや、でもさ、具体的にはどういう……」

「そうだなあ……じゃあさ、アクセサリーとかにしたら？ネックレスとか」



「でも、それって高いんじゃない……」

「大丈夫だろ。安いのなら5000円ぐらいのもあるぞ」

5000円……。バイトをしておらず、小遣いを貰っている身としては少々辛いけど、仕方あるまい。これも凜へのプレゼントの為だ。

そして翌日の土曜日。僕は近くのデパートへ来てみた。何か彼女に似合いそうなものはないだろうか。と、あるペンダントが目に入った。

「これ……」

銀色で、真ん中に赤いのが埋め込まれている。特に他と比べてどうというのは無かったのだが、何だかそれに惹かれた。

そして、5000円をまるまる使って買った。よし、プレゼントは用意した。あとは、明日だ。

翌日。学校から10分ぐらい歩いた所にある神社。病院からも同じくらいで着く。夜の6時に神社の前に集合である。僕は10分ほど早く着いた。迎えに行ったら良さそうなものだが、彼女曰く、待ち合わせもデートの楽しみなんだとか。

もともと、凜は来られるかどうか微妙なのだが。というのは、体調が良ければ来られるのだが、もし悪ければ来ることは出来ない。その時はとりあえずプレゼントだけでも持って行こう。そう決めた。

ふと、視界が何かで覆われる。

「だ〜れだ？」

「……凜？」

「あつたり〜」

ニコツと笑う凜がいる。

「体は平気なの？」

「うん。でもね、2時間で帰らないといけないんだって」

「そつか。あんまり無理させられないもんな」

と、凜が浴衣姿だったことに気付いた。思わず見とれてしまう。

「どうしたの？」

不思議そうに尋ねる凜。

「いや、その……か、かわいいよ……浴衣」

僕は照れつつも、何とか褒めることが出来た。が、凜はそれを聞くなり笑いだした。

「なっ、なんだよ、笑うことないだろ？」

「あはは、ごめんなさい、ちょっとね、照れくさそうなのがかわいくて」

「チエーツ」

「あ、ごめんごめん、ありがとう」

「お、おお……」

改めてお礼を言われると照れる。

「これね、お母さんのお下がりなんだ。今日来てくれて、着させて貰ったの」

「そうなんだ」

「ねっ、早く行こ！時間も限られてるんだし」

そう言って凧は後ろを気にしながら走って行く。僕はそれについて行く。

お祭だけあって、色々な出店があった。金魚すくい、ヨーヨー釣り、ベビーカーステラ……沢山見て回った。凧はしゃぎっぱなしだ。本当に病気なのか？と疑ってしまうほどだ。でも、彼女の楽しそうな様子を見ると、こっちも嬉しくなった。

「はあ、疲れた〜」

「色々回ったからね。大丈夫？辛くない？」

「うん、平気。ありがとう」

僕は石の階段に座って空を見ていた。七夕にふさわしい、満天の

星空である。

「きれい……」

「本当に……珍しいな、こんなに見えるなんて」

それはもう本当にきれいで、例えるなら宝石箱の中身をひっくりかえしたように、キラキラと光っている。

（そろそろかな……）

「凜」

「うん？」

「今日はさ、プレゼントがあるんだ」

「え、なあに？」

「これなんだけど」

「ありがとう。開けてみていい？」

「いいよ」

凜は包みを開ける。そしてペンダントを見ると、パアッと明るい顔をした。

「わあ……」

どうやら喜んでくれたようで、胸をなで下ろす。

「嬉しいな、ありがとう!」

凜は早速つける。

「どう、似合う?」

「ああ、似合ってるよ」

「これ、一生の宝物にするね」

「そんな大げさだよ」

「そんなことないよ。だってせっかく悟君が買ってくれたんだもの」

ニツと彼女は笑った。

「実は、私もキミにプレゼントがあるんだ」

意外な言葉だった。

「えっ、何々?」

「これ……」

見るとミサンガだった。切れたら願いが叶うというアレである。

「え、これ、作ったの?」

「うん。コッソリ作ってたんだ。看護婦さんがいい人で、作り方教えてくれて」

僕は凄く嬉しかった。今までに女の子に何かを貰ったことなんて無かった。それだけに喜びもひとしおだ。

「ありがとう。大切にするよ」

「よかった。喜んでもらえて」

そしてまた星を見上げる。本当にきれいだ。ふと凧を見ると、凧もこっちを見ていて、目が合って微笑む。そして、自然と手をつないだ。

凧の手は少し冷たかった。手の冷たい女の方は、心が温かいと聞いたことがあるが、凧もきつとそうだ。

「悟君、手、あったかいね」

「そ、そう？」

「もう少し、そっち行ってもいい？」

「ああ、いいよ」

そう言うと凧は真横に来て僕の肩にもたれかかってきた。僕は動揺を隠せない。が、凧はそのうちにすぐ寝てしまった。

「寝ちゃったか……」

なんだかホツとする。僕は夜空に向かって祈った。神様、どうかこの娘の病気が治りますように。その為なら、僕は何だってします。だから彼女の病気を治してやって下さい。

「ありがとう……」

凜が呟く。どうやら寝言らしい。きっと楽しい夢を見ているのだろう。幸せそうに笑みを浮かべている。もう少しで帰らなければいけなかったが、もうしばらくの間、このままでいたいなと思った。

## 第7章 『突然』

夏休みはあっという間に過ぎていった。部活も合宿があったりして、少し速くなったんじゃないかと思う。今年の夏休みはいつもより早い。

でもそれは、やっぱり凧のおかげなんだろうと思う。夏休みも部活の終わりにちよくちよく通っていた。

その日も例によって凧のもとへ行き、談笑に華を咲かせていた。

「そうそう、だから俺、断るわけにもいなくて……」

「へえ」

と、凧がケホケホ、と2つ咳をした。

「大丈夫？」

「うん、平気だよ」

そうは言うものの、何だかボーッとしている。

「本当に大丈夫？何かボーッとしてるよ？」

「うん……そうね、ちょっとだけ疲れてるかも」

「そっか。じゃあ今日は帰るよ」



「ごめんね。せっかく来てくれたのに」

「何言つてんだよ。ゆっくり休みなね？また来るからさ」

「うん、ありがとう」

「それじゃあね」

「うん、さよなら……」

凜の部屋を出て、病院の入口まで来た。ふと、凜の部屋のある方を見上げる。

(……。)

何だろう。胸騒ぎがする。とても嫌な胸騒ぎが。このまま帰ってい  
いんだろうか。何だか、このまま帰ったら、もう2度と会えなくな  
ってしまつ気がする。

僕は一旦凜の部屋の前まで戻って来た。と、中から咳が聞こえる。  
そこまで大きいものではなかった。しかし、次の瞬間、

「ッ……！！ゲホッ、ゲホッ！！」

(……！)

突然それがとても苦しそうなものになった。僕はたまらず中に入る。

「凜……！！」

ふと床を見ると、赤いものが2つ3つ……。

（血を吐いたのか？）

ドスン！！突然大きな音がしたかと思うと、凜がベッドから転げ落ちていた。そしてそのまま動かない。

「凜！！」

僕は凜を抱き抱える。しかし反応がない。

（嫌だ……）

「凜！しっかりしろ、凜！！」

しかし動かない。

（嫌だ……！！）

「凜！！おい、凜！！」

僕は我を忘れ、ただただ呼び掛けることしか出来ない。

（嫌だ！！！！）

僕はようやく、側にあったボタンに目が行った。

（ナースコール……）

僕は夢中でそれを押し続けた。程なく看護婦さんが駆け付けて、先

生を呼んでくれ、そのまま凜は手術室へと運ばれていった。

「カチッ」

「手術中」のランプが赤く光る。僕はその前のベンチに座りただ祈り続けた。

（どうしよう……）

例えようの無い不安が襲って来る。もし、凜が助からなかったら……。このまま会えなかったら……。弱気になってしまう。

嫌、これじゃ駄目だ。神様、どうか彼女を助けて下さい。まだ死なせないで下さい。助けてくれたら、僕は何だってします。本当です。一生のお願いです。どうか、彼女を助けてやって下さい。

「悟っ!!」

剛が大慌てでやって来た。

「剛……」

「凜ちゃんは？」

僕は「手術中」の字に目をやる。

「そうか……」

僕はまた下を向いた。すると剛が僕の肩を叩く。

「大丈夫だ。あの娘は助かる。きっと助かる。あんないい娘が死ぬわけねえ」

「剛……」

「お前のことを好きになっってくれるような奴なんてな、よっぽどのいい娘に決まってるだよ！」

剛はニツと笑う。それを見て泣きそうになる。

「なんだよ！元気だせ！大丈夫だから、な？」

「うん……」

ふと、向こうの方からバタバタと2人走って来る。40歳ぐらいだろうか。

「凜！！」

そう叫んで、僕らの前に来た。

「悟君……だね？」

「そうですけど……」

「私は……高木圭一<sup>けいいち</sup>。凜の父です」

背は180センチぐらいだろうか。見るからにして優しそうだ。側にいるお母さんも優しそうだ。やはり、この親あってあの子ありだ。

「凜から話は聞いてるよ。よく凜の話し相手になってくれてるそうだね。本当は私達も、毎日でも行きたいところなんだが、仕事に追われてそういうわけにいかなくて。だから、君には感謝しているよ」

「そんなこと……」

「まあ、今はそんなこと言ってる場合じゃないか……」

「両親は2人ともとても心配そうだ。お母さんは泣いてしまっている。そりゃそうだ。実の娘が生死の境をさまよっているのだから。」

時間が過ぎていく。もう12時を回っていた。

「ブッン」

手術中のランプが消えた。その場に緊張が走る。鼓動が急に速くなった。

みんなが固唾を飲む中、先生が出て来る。

「先生！！娘は……凜はどうなんですか！？」

お父さんが大声で言う。

すると先生は、それまでしていた厳しい表情をフツと解いて言った。

「大丈夫。一命は取り留めました。手術は成功です」

「本当ですか！？」

僕は立ち上がった。思った以上の大声が出て、ちょっと恥ずかしくなった。

「ええ。ただ、しばらくは安静にしていないと……」

「そうですか」

「やったじゃないか悟！！助かったってよ！！」

「うん……うん……」

僕はその場にへたりこんでしまった。何だか力が抜けた。

「それじゃあ皆さん、今日はもう遅いのでお帰り下さい」

看護婦さん達が帰るように促す。仕方なくみんな帰る。が、どうしても帰りたくない、と思った。側にいたい。どうしても。

「あのっ！」

僕は振り返って叫んだ。

「何です？」

「その……彼女の側に居ては駄目ですか？」

「いや、でも……」

「その……あんなことになって、起きた時に誰も側にいなかったら、とても不安になると思うんです。お願いです、彼女が起きるまでで

いいんです！側にいさせて下さい！」

僕は先生に懇願する。必死に頭を下げた。

「俺からもお願いします！コイツを側にいさせてやって下さい！」

剛も一緒になつて頼んでくれる。先生達は困惑している。まあそうだろう。無理は承知のうえだ。

「私からもお願いします」

と、お父さんも頭を下げていた。

「おじさん……」

「きつと娘も、君がいる方が嬉しかろうからね」

ニツと笑う。先生達は少し考える。そして、

「わかりました。いいでしょう。ただし君だけ。それと、起きたらすぐに帰ること。いいね？」

「先生……！」

そして僕は、寝ている凧の側にずっと座っていた。凧はまだ意識が戻らない。眠っているかのようにだ。こうしていると、色々考えてしまふ。

（凧……）

手術は成功したらしいけど、もしこのまま意識が戻らなかったら、もし凜がいなくなったらどうしたらいいのか、仮に意識が戻ったとしても、また同じようなことがおきないだろうか……。どんどん不安になる。

すると突然、凜がゆっくりと動いた。意識が戻ったのだ。

「凜……！」

「悟……君？」

「凜……！！」

凜の声を聞いた途端、さっきまで考えていたことは全てどこかへ行ってしまった。凜が生きている、今はそれがただ嬉しかった。とめどなく涙が溢れてくる。

「どうして……そんなに泣いてるの？」

「だって……だってよ……」

涙でぐじゃぐじゃになって、言葉にならない。よかった。本当によかった。

「悟君……」

凜は体を起こす。

「あのね、ずっと夢を見てたの」



「夢？」

「うん。階段が目の前にあって、それを登らなきゃいけないって気がして。どんどん登っていったの。そしたらね、キミがまだ行っちゃダメだ！って、私を連れ戻してくれたの。多分、あのまま登ってたら私、死んじゃってたんだと思う。また、助けられちゃったね」

凜は笑う。それを見て、また涙が溢れてきた。

「よかった……本当によかった……」

「悟君……ありがとう」

凜も泣いていた。2人して、ずっと泣いた。ただただ嬉しくて。

しかし、やはり凜の容態は、予断を許さない所まで来ていたのだった……。

## 第8章 『決意』

後からわかったことだが、あの時凜は、とても危ない状態だったらしい。あと少し気付くのが遅ければ、助からなかったかもしれないと、看護婦さんに言われた。

つまり、もしもあの時凜の所に戻っていなかったら、本当に二度と会えない所だったかもしれないということだ。そんなこと、考えただけでもゾツとする。

しかし、どうやら事態はそれだけでは終わらなかった。

「何だつて？」

僕は今凜が言ったことに耳を疑う。

「昨日ね、先生から言われたの。この間みたいな発作がいつまた起こるかわからない。もう手術しなきゃダメだって」

「手術……」

「先生が言うにはね、これに成功すれば、病気は治るらしいの」

「そ、それじゃあ！」

「でもね、失敗したら、そのまま死んじゃうだろうって……」

「そんな……」

「治る」と聞いて歓喜したのも束の間、そこまでの病気を彼女が抱えていることを、改めて思い知らされる。

凜は下を向いてしまっている。僕は、何とか元気づけようとする。

「で、でも、成功したら治るんだろ？」

わざとらしく明るいう調で言った。しかしそれは効果がなかった。

「でも……」

凜は下を向いて言う。

「私……手術受けたくない……」

「え？」

「だって、手術して、失敗したらもう死んじゃうんでしょ？でも、しなかったら失敗した時よりは長く生きられるし……」

「で、でもさ、成功したらずっと生きてられるし……」

「怖い……」

凜は微かに震えていた。

「だって死んじゃったら、悟君や、お父さんお母さん、色んな人達と、もう会えなくなるでしょう？私、昔は死んじゃおうって思ったこともあったけど、悟君が来てくれて、何だか幸せだなんて感じてこの間の時、私、もっと生きたいって思った」

「だったら……」

「でもだめ！」

「だって、失敗したら、本当に、会えなくなっちゃう！悟君とこうして話したりも出来なくなる！そりゃ成功したら治るのかもしれないけど、失敗して今を失うのは怖い。怖いよう……！」

凜はしがみついてくる。その手はどうしようもないくらい、震えていた。

僕は神様を恨んだ。ああ、どうしてこんな、17歳の女の子にこんな試練を与えるのだろう。代われるものならいくらでも代わってやりたい。

「死」への恐怖とは、一体どんなだろう。人間誰しもいつかは死ぬしかし、今まさに死ぬかもしれないという恐怖は、きっと想像もつかないぐらいだろう。

まして17歳の女の子だ。怖いに決まっている。恐怖に怯える凜の前に、僕は何も言えなかった。

「はあ……」

昼休み。ため息をついてしまう。凜があんなに苦しんでいるのに何も出来ない自分。のうのうと学校に來ている自分。それが齒がゆくて、悔しかった。

不意にポン、と頭を叩かれる。

「どうしたんだよ剛。ため息なんてついて。凜ちゃん無事だったじゃんよ」

剛はまだ知らないようだ。僕は凜の置かれている状況を話した。

剛は言葉を失っている。が、やっとの思いで口を開く。

「それでため息ばかりついてんのか？」

「それもある。でも……」

「でも？」

「……なんて言うか、自分がすごく歯がゆくてさ。凜があんなに苦しんでるのに、俺、何もしてやれない。」

自分という存在は、大切な人が苦しんでいる時に助けてもやれないのか。いかにちっぽけな存在なのかを思い知らされる。本当に惨めだ。

凜が抱える不安や恐怖を考えると、いても立ってもいられないのに……。

「ま、まあ、元気だせよ。そんなに自分を責めるな。お前まで暗くなってる、凜ちゃんだってもっと不安になるだろ？」

「剛……」

「それに、助けることは出来なくても、勇気づけることは出来るだ

る？」

「でも、どうやって？」

「そ、それは……」

と、ポケットの中の携帯がブルブル震える。

「メールか？」

「ああ」

何だろうか。見てみるとキャプテン、まあ新キャプテンになった同級生の奴からだった。

『今日の練習後に、新人戦の出場種目を決めるので、各自考えといて下さい！』

「新人戦？」

「ああ、今度試合があるんだ」

「それって例のアイツも出んの？」

「ああ、出るんじゃない！」

僕はその時ピンと来た。

「それだー!!」

「わっ、いきなり大声出すなよ！」

「俺、わかったよ！彼女の為に、俺が出来ること……！」

「そ、そうかよ」

新人戦は県大会だ。つまりアイツ 高見総一郎も出て来る。もし僕がアイツに勝てたなら、きっと彼女を勇気づけることが出来る筈だ。そりゃあ、例のトラウマもある。一筋縄ではいかないだろう。だがこれはきつと、神様からの試練なんだ。

七夕の夜、僕は神様に、何でもするから彼女の病気を治して欲しいと願った。

僕は今、試されているのかもしれない。本当に彼女のことを想うのなら、乗り越えて見せろ、と。

彼女に伝えに行かなきゃ。直ぐにでも会って伝えたい。

「剛、俺、次サボるから適当に言っといてくれ……！」

「えっ、お、おい……！」

僕は病院へ走った。そして大慌てで凜の部屋へ。

「凜……！」

興奮のあまり扉をバン！と開けてしまった。凜は驚いている。

「ど、どうしたの？そんなに慌てて」

「話が、あるんだ」

「え？」

僕は呼吸を落ち着かせて続けた。

「あのさ、手術……受けてくれないか？」

「え……」

凜は黙ってしまう。おじさん曰く、自分達や先生の再三の説得にも、首を縦に振らなかったそうだ。

「やっぱり……怖い？」

凜はコクッ、と頷く。

「じゃあさ、ちょっと賭けをしないか？」

「賭け？」

「ああ、単純だね。あのね……」

一つ間をおいて言う。

「今度、新人戦って言って、1・2年生だけの県大会がある。そしてそれに高見総一郎も出る」



「……」

「それでもし、俺が高見に勝ったら、手術を受ける。もし負けたら、凜の好きにしたらいい。どうかな？」

「え、それって……！！」

「つまり、俺が例のトラウマを乗り越えられたらってこと」

凜は慌てだす。

「でも、前はダメだったんでしょう？それに、高見って人、とっても速いんじゃない？」

「それは……そうだけど」

「それにそんな、私なんかの為にそこまで辛い思いすることないよ！無理しないで……」

「凜！！」

僕は凜の両の肩をガシツと掴む。

「俺な、今凄く辛い。何でわかる？君が苦しんでるのに何も出来ないからさ」

「悟君……」

「俺には、病気を治してやることも、代わりになってやることも出来ない。走ることしか出来ない。ならせめて、それで君に勇気をあ

げたい」

僕は凜の目をまっすぐ見つめる。

「そりゃあ俺だって怖い。震えるくらい。でもさ、俺が乗り越えられたら、凜だって乗り越えられる。だからさ、俺を信じてくれないか？」

「悟君……」

「俺は絶対乗り越える。そして凜も絶対治る。な？」

僕は精一杯の笑顔で彼女に言った。震えるくらい怖いけど、凜の辛さを考えたら、このくらいどってことない。待ってる、凜。直ぐに勇気を届けに行くよ。

## 第9章 『overcome』（前編）

その日から、僕の猛練習が始まった。こんな言い方をすると、今まで練習をやっていなかったようだが、そうではなくて、今まで以上に、ということだ。

朝、学校へ行く前に走り、昼休みにも走り、部活でも走った。さすがに練習後はバテバテで、凜の所へは行けないでいたが、窓からたまに見える。手を振ると向こうも手を振ってくれる。

そして、練習のかいがあつて、僕は地区予選を突破し、県大会へ進出を決めた。これで1歩、凜の手術に近付いた。

「予選、突破したんだ。次はいよいよ県大会さ」

「うん、でも……」

凜は心配そうである。

「あのさ、最近特に根詰めて頑張ってるけど、大丈夫？」

「ああ、それなら平気！ちゃんと休んでる時は休んでるから。マッサージとかもしてるしね」

実は親の知り合いに、腕のいいマッサージ師がいて、特別にタダでもらっている。おかげで体は軽くなる。やってる時は凄く痛いのだが。

「そう？くれぐれも、無茶はしないでね」

優しい娘だ。自分が死んでしまうかもしれないのに、僕を気遣ってくれる。やっぱりまだ死なせるわけにはいかない。改めて闘志を燃やした。

翌日、部活の時間。キャプテンに呼び止められる。

「おい、悟。県大会のスタートリストが来てるから、目え通しとけよ？」

そう言われ、走る時間をチェックする。午後2時からだ。

「昼からか……」

次に、走順に目をやる。沢山の名前がある中で、僕は見つけた。見つけてしまった。あの名前を……。

「高見…総一郎……」

コイツに勝たなければいけないのだ。改めて名前を見ると、少し決意が揺らぐ気がするが、そんなこと言ってられない。

（やるしかない）

僕は揺らぎかけた決意を固める。試合は、もうあさってという所まで来ていた。

そして試合前日。軽い調整だけで済ませ、凜のもとへ。前日というのは、あまり走りすぎると、疲労を残してしまう。ここまでくると、

今までやってきたことを信じるしかない。

「いよいよ明日か……」

「そうだね」

「俺のこと、ちゃんと応援しといてくれよ？」

「……」

凜は浮かない顔。

「悟君、本当に大丈夫？」

「へ？」

「その……もし、明日走って……負けちゃって……走るのが、嫌いになったりしないかって……」

凜はポツリポツリと続ける。

「本当に、私のせいで、無理をさせてごめんなさい……」

いつにも増して弱気な凜。僕のことを本当に心配してくれてるんだ。何だか嬉しくなる。が、僕は凜のおでこをピン、と弾く。

「いったあ……」

「何言つてんだよ！今からそんな弱気で！何？俺に負けてほしいの？」

「そ、そんなこと……」

「じゃあちゃんと応援する！」

「う、うん……」

「じゃあ、頑張れって言って」

「え？」

「明日頑張れるように、笑って頑張れって言って！」

凜は少しして、無理矢理笑顔をつくる。そして言った。

「が、頑張ってね」

「おう、頑張るよお！これで優勝しちゃうかもな！」

「……ばか」

凜は泣きそうになっている。本当はね、空元気なんだよね。今俺、  
すごい怖い。じっとしていると、震えがきそうなくらい。

正直言うと、今にも逃げ出してしまいたい。明日だっと思うと、  
てもたってもいられない。

でもね、君があんまり優しいから、心配してくれるから、頑張ろう  
っと思うんだよ。

そんなに優しい君が、いなくなってしまうなんて、俺、絶対に嫌だ。だからそれを思うとさ、乗り越えられそうな気がするんだ。

だから見ててくれよ。俺、頑張るからさ。

翌日、9月22日、快晴。気温はやや高め、しかし風が吹いているせいか、それほど暑くはない。

いよいよ運命の日を迎えた。もう少し気負っているかと思っただ、不思議なくらい落ち着いていた。

アップをする。そしてスタンドに目をやる。凜の姿はない。まあ入院しているのだから、仕方ないといえば仕方ない。

それはいいとして、腑に落ちないのは剛だ。明日来てくれと言っただけ、

「あ、悪い。明日デートなんだよね!」

だ。ったく、こんな日ぐらい応援に来いっつうの。まあ、アイツらしいと言えらしいけど。

そんなことを考えられる自分に、少し余裕を感じた。

アップを済ませ、スタンドに戻ろうとした。と、よそ見していたせいで、ドン!と前から来た人とぶつかって転んだ。

「す、すいません」

謝って顔を上げる。その人は見たことあるような金髪だった。

「高見……」

金髪で長身。刺すような鋭い目つき。威圧するようにこっちを見て  
いる。

「ん？何だお前？俺のこと知ってんの？」

高見は、まるで覚えていないような言い方だった。

「高見ー！」

遠くの方で、奴を呼ぶ声が聞こえる。

「おう！じゃ、気をつけるよな」

その声の方へ去って行った。

（高見……）

いざ対峙すると、気おされてしまいそうになる。でも、僕はもう後  
には引けないんだ。やるしかない。

僕は、勝つんだ。アイツに、トラウマに。凜のために。

そして1時50分。招集場所には沢山のランナーが集結した。僕も  
そこに並んでいる。

スタート位置に着くようにと指示される。僕は周りを見回して、高  
見を探した。



（いた！）

僕は高見の真横へ行った。

「おつ、なんだ。お前も5000だったのかよ」

「高見……」

僕は思い切って言った。

「俺は今日、お前に勝つ」

「はあ？」

高見は何言ってたコイツ、と言わんばかりの目で見ている。

「おもしれえ。どこのドイツかは知らねえけど、やれるもんならやってみろ」

やはり高見は覚えてないらしい。そしてスタートの刻を迎える。心臓は高鳴っているが、何となくそれが心地よい。

「ヨーイ……」

パン！！

## 第9章 『overcome』（後編）

レースがスタート。全員がダンゴ状態でひしめく。と、高見がいきなり前に出て、後ろの集団を引き離していく。

僕は、今はここにいて、後半に勝負をかけようと思った。が、

（ダメだ！！）

直感的に、そんな悠長なことを言っている場合ではないと判断した。ヤツのペースに付いて行かないとマズい。

僕は必死に高見にくらいついていく。1000m、2000mと過ぎる。僕は少し息があがっていたが、何とかついていっていた。

これならいけるかもしれない。そんなことを思いだす。

「くそっ、しつけない！」

走りながら高見が言う。

「俺は今日、お前に勝つんだ！」

僕も言い返す。

「何なんだおま……！」

高見が言いかけて止める。そしてニヤツと笑った。

「思い出したよ」

それまで少し前を走っていたのを、僕の真横へつけて呟く。

「中学の時いたよ。お前みてえな鬱陶しいヤツ。ソイツは後半バテて、ビリッケツだったけどな。お前だったのか」

ドキン、嫌な胸騒ぎがする。

「それで何？涙の再挑戦ってか？へっ、下らねえ」

高見はさらに揺さぶりをかけてくる。そして残念ながらそれは僕には効果は抜群だった。みるみる動揺していく。

「お前みてえに才能ない奴、頑張ったってしょうがねえんだよ」

ズキン、胸が痛くなる。またしても、奴から同じ台詞を吐かれるとは。奴は揺さぶりをかけようと言ったのだろうが、僕にはとても堪えるものだった。しかし、

「うるさい！！」

僕は高見に向かって叫んだ。あの頃とは違う。背負うものだってあるんだ。そんなことにぐらついてられない。

高見はチツ、と舌打ちをする。

「なら本気だしてやるよ！！」

そう言って高見はグン、とペースを上げる。僕も必死に付いて行く。

しかし、だんだんと差が開いていく。

「くっ……！」

周を追うことに、ジリジリと開く。さっきまでは気にならなかったが、開いてくると、疲労一気に襲ってくる。苦しい。

（ダメか……）

もうラスト2周だ。差は50mはあろうかというくらいだった。僕は失速していき、後続にも追い抜かれる。そしてどんどん弱気になってしまう。

くそっ、偉そうなことやって、結局俺なんてこんなもんか。あんなに練習したけど、やっぱり俺みたいな奴、頑張ったってしょうがないのかな。

もう疲労でどうしようもなく、やっと走っていた。直ぐにでも止めてしまいたくなる。ふと浮かぶのは凜の顔

凜……ごめんな。俺、あんなこと言って、結局君を助けられなかったよ。本当に、ごめんな……。

と、ドスン！と足がもつれてその場に転倒する。

なんとか起き上がろうとした時、左手のミサंगाが目に入った。

（ミサंगा……）

凜との思い出が甦って来る。初めて会った日。僕は彼女が自殺する

んじゃないかと飛び込んだ。

そして彼女のピアノ。本当に感動してしまった。

喧嘩した日。やり場のない怒りに苛まれた。

仲直りした日、素直になれて、分かり合えた気がした。

そして凜が倒れた日。助かって、まだ彼女が生きていることに涙が止まらなかった。

僕は立ち上がる。そして、まっすぐ前を見据えた。このまま終わるわけには行かない！！

「まだだあ！！」

僕は息を吹き返したように猛然と追いかけた。確かに俺みたいな奴が頑張った所で、しょうがないのかもしれない。

でも、俺はまだ諦めたくない。凜は、まだ生きるんだ。俺は諦めない。彼女の背中を押してやるんだ。そして、俺も乗り越えるんだ。

僕はドンドンと、さっき抜かれた奴をパスしていく。高見との差もグングン詰まっていく。高見が心なしかペースが鈍ってきている。これはチャンスだ。

そして僕は、ラスト1周の手前、ついに高見をとらえた。

「チッ、しつこいんだよてめえ！！いい加減にくたばりやがれ！！」

「俺は……お前に絶対に負けるわけにいかない。凜は、こんなのは比べ物にならないくらい頑張ってた。だから俺がこんな所でくじけるわけにはいかない！俺が勝つんだ！！」

「っ、何を訳わかんねえこと言ってる……」

「うおおおお！！」

僕はさらにスパートをかける。体はもう、半分くらい言うことをきいてくれないが、気持ちでなんとか足を前へ、前へやる。

高見もさすがなもので、トップを死守している。そしてついにラスト1周を告げる鐘が鳴り響く。

ラスト1周。2人のデッドヒートはなおも続いている。僕はもちろん、高見も必死である。

僕は走りながら、ここまで本気で頑張れている自分に驚いていた。そりゃあもちろん、頑張るつもりではいた。けれど、心のどこかで頑張ることを恐れていた。

本気で頑張って、また傷つくのが怖かった。でも、頑張るってことは、本気で頑張るってことは、思っていたより痛いものではないらしい。

「フフフ……」

体の底から、笑いが込み上げてくる。最初のうちは、本当に凜のためにとだけ思っていた。しかし、高見と走っているうち、忘れていた何かを思い出した。



意外だった。高見が謝るなんて。僕は少し笑って言った。

「何のことだ？俺は忘れたよ」

「お前……」

高見は何だか穏やかな顔をしている。

「次は絶対倒してやったからな。怪我とかすんじゃねえぞ」

「お前もな」

後ろを向き、じゃあなと言わんばかりに手を高く上げて、高見は去って行った。

新人戦が終わった。僕はしばらくスタンドでボーッとしていた。

（俺……勝ったんだ……）

正直、まだあまり実感が沸いてこない。レース前は確かに、凜のために絶対勝とうと思っていた。

（確かにずっと凜のことを考えていた。でも、それだけじゃなくて……）

あの時、「楽しい」と思った。こんなこと、本当に久し振りだった。それに気付くことが出来たのは……。

（帰るか……）



競技場の入口を出る。と、向こうから声がする。

「悟ー！！」

剛だ。今来たのかよ。遅えつつの。

「なんだよ今来たのか？」

僕はちよつと怒ったように言う。

「そう言っなって！ゲストもいるんだから！」

「ゲスト？」

「あっち見てみるよ」

剛は右の方を指差す。僕もそっちを見る。そして驚いた。

「凜……」

なんとそこには凜がいた。

「へへっ、無理言っつて連れて来ちゃった」

鼻をさすりながら剛が言う。

「じゃ、俺帰っからさ、ちゃんと送ってやれよ？」

剛は帰って行った。競技場の前で見つめ合う2人。

「俺さ、勝ったよ」

僕は口を開く。

「ホントビックリだよ。凜のためにって思って走ったらさ、勝てちやったよ」

「悟君……」

「それと……さ」

「何？」

「……ありがとうな」

凜はその意味をよく把握出来ていない様子だ。

「え？どうして？」

「あのさ、俺、走ってて、最後とかさ、すっげえ楽しかった。例のトラウマで、走ってて楽しいって心から思えたことなんてなかった」

でさ、今回は、凜のために絶対勝つつて思ってた。そしたらさ、本気の本気で頑張れた。そしたらさ、楽しかったんだ」

最初に高見が飛び出した時、ついて行くか正直迷った。でも、勇気を出して行けたのは、凜のためという思いからだ。だから……。

「だからさ、あの時勇気を出せたのも、走るの楽しいって思えたのも、乗り越えられたのも、君のおかげ。だから、ありがとう」

「悟君……」

「凜もさ、俺、頑張ったからさ、手術頑張れよ。大丈夫、俺がついてる。それに、辛いことの後には、楽しいことが待ってるんだぜ？」

「悟君……」

凜は僕に飛びついてきた。そして、えーんえーんと、まるで子供のよう泣き出す。

「お、おいおい、泣くなよ」

「だって……だって……」

凜はさらにギュッと僕を抱きしめる。

「私……頑張るね。キミにもらった勇気で、私、頑張るから……」

「凜……」

凜はいつまでも泣いていた。大丈夫、きつとうまくいく。俺、乗り越えられたから。だから、頑張れよ。

大丈夫。神様はきっと、君を助けてくれるよ。いつかの願いを叶えてくれるはずだよ。なあ、そうだろ？

## 最終章 『旅立ち』

数日後、凜の手術が行われた。いつの間にか、凜のことは、病院中の患者の知るところとなっており、その日は文字通りみんなが固唾を飲んで見守っている。

手術は何時間にも及んだ。僕はただただ成功を祈っていた。

そして、先生が出て来てニコツと笑うと、病院は歓喜につつまれた。

おじさんとおばさんは抱き合って喜び、僕も剛と抱き合っていた。

そして大粒の涙がこぼれた。見ると、みんな泣いていた。辺りが、優しい涙で溢れていた。

その後凜は、みんなの見守る中で目を覚ました。おばさんは泣いて抱き付き、凜も泣いて、僕も泣いた。と、凜が僕に向かってピースをしていた。

「やったよ!」

彼女の笑顔がそう言ってるように思えて、僕もピースで答えた。

さらに数日後、退院の日。凜は先生、看護婦さん、それに他の患者の人達に拍手をおくられ、照れくさそうだった。

と、凜がおばさんの方を向いて、

「ねえお父さん、お母さん、ちょっと、最後に見てきたいものがあ

るんだけど、いい？」

「え、なあに？」

「内緒」

「あらあら。いいわ。でも、あんまり遅くなっちゃだめよ？」

「うん、わかった」

そう言つと凜はこっちを向いた。

「悟君、行こっ？」

僕は彼女の行きたい所がすぐにわかった。そう、2人が出会った、あの屋上。

「うわあ……」

「きれい……」

そこにはあの日と同じ、きれいな夕焼けが広がっていた。僕らはベ  
ンチに腰掛ける。あの時はちょっと空けたが、今は隣だ。

「いろいろ……あつたよね」

凜が感慨深げに言う。

「本当に……」

マヌケな出会いから、通うようになり、元気づけられたり、喧嘩したり、仲直りしたり……。お祭にも行ったなあ。

「今まで……ありがとうね」

「な、なんだよ。改まって」

「なんかね、言っておきたかったんだ。ありがとうね」

「そ、そんな……。俺の方こそ……」

と、凜が僕の前に立つ。

「あのね、私……ヨーロッパに留学するんだ」

「え、そうなの？」

「うん。お父さんがね、お前は今まで頑張ってきたんだから、これからはお前の好きにしていって。それでピアノの勉強をしたいって言ったの。そしたら、知り合いがウィーンにいて、家を紹介してくれるから、そこにみんなで住もうって」

「そうだったのか……」

「それでね、向こうの音楽の学校に転校するの。私もね、本場でそういう勉強がしてみたいって思ってた。ピアニスト、本当になりたいから」

「そっか」

僕も立ち上がる。そして、言った。

「頑張つてこいよ」

「悟君……私のわがまま、許してくれるの？」

「許すも何も、凜が自分で選んだ道じゃないか。俺はそれを応援したい」

「悟君……」

「それに、凜のピアノ、本当に凄いからさ、絶対いいピアニストになれるよ。そりゃあ、会えなくなるのは寂しいけど、手紙とか書くからさ。だから……大丈夫だよ」

本当言うと、行って欲しくなかった。だけど僕は気丈に振る舞う。だって、凜が夢に向かって歩き出そうとしてるんだ。止めることなんて、出来やしない。

「それに……さ。いつか、迎えに行くから」

それを聞くと、凜はまた僕に抱き付いてきた。

「ありがとう……ありがとうね……」

「って、おいおい、また泣いてるのかよ。ホント、よく泣くよなあ」

「だって、いつもキミが泣かすんじゃない」

そう言う凜は、泣きながらも嬉しそうだった。

「大好きだよ……」

「俺だって……」

そんな2人を、夕日がいつまでも照らしていた。

そして凜が旅立つ日。僕は剛と空港へ見送りに来ていた。

「凜ちゃん、向こう行っても頑張れよ！応援してるぜ？」

「うん、ありがとう剛君」

凜はとても幸せそうに見えた。

「凜……」

「ん？なあに？」

「その……辛かったら、いつでも俺に言えよ？そっちまで、すぐに行くから」

「フフッ、ありがとう。それじゃあ私もついくな？お父さんとお母さん、待ってるから」

「ん……気をつけてな」

向こうを向いて歩き出す凜。と、こっちへ戻って来て、

「ね、ちょっと目を瞑って？」



「え、何？」

「いいから」

何だろうと思いつつ目を閉じる。と、何かが右のほつぺたにあたった。少しおいて、それが凧の唇だとわかった。途端に顔が真っ赤になってしまう。

「悟君、約束通り、いつか迎えに来てね！じゃあ……行って来ます  
！！」

ビツ、とこっちへ満面の笑みで敬礼をして、走り去って行く。そして凧はウィーンへと旅立って行った。

「行っちゃったな……」

「ああ……」

と、剛が僕の手に残っているミサンガに目をやる。

「そう言えば、それまだ切れてないのな」

「これが切れるのは、まだもうちょっと先だよ」

「先？」

「そ。もうちょっとな」

このミサンガはきつと何年か後、凧が夢を掴んだ時、そして……。

凜からは、本当にいろいろなことを教えてもらった。何よりも、走ることの楽しさを思い出させてくれた。

頑張ることも教えてくれた。辛いことがあっても、逃げるんじゃない。立ち向かって、乗り越えられたら、楽しいことが待ってるんだ。

それに気付かせてくれたのは凜、君だよ。だから俺、これから頑張っていけそうな気がする。そして、いつか君を迎えに行くよ。

その日まで、少しの間待っててくれな？

ふと、空を見上げた。なんだか、神様も、笑っている気がした。

おわり

## 最終章 『旅立ち』（後書き）

今まで読んでくれた方、どうもありがとうございました。とりあえず、これで完結です。

初めてっていうこともあって、なかなか難しいなと思わされる所もありました。正直、よくここまでやり遂げられたなと思います。

で、主人公の悟ですが、実はちょっと自分にうつすらと重ねてます。自分も中・高と陸上部でした。種目は違いますが。

それで、頑張つてないことはないんだけど、どうも本当に頑張れている気がしないっていうのをずっと感じてて、その辺の引掛かりが、今回書いて見ようって思ったきっかけでした。

最後に、読んでくれた皆さん、本当にありがとうございました。これを読んでくれて、少なからず何かを感じ取ってくれたら幸いです。また何か気が向いたら書くかもしれないですが、その時はまたよろしく願います。

みうらいさお

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9089c/>

---

trying

2010年10月17日02時22分発行